

# 博多 62

— 博多遺跡群第90次発掘調査概報 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第557集

1998

福岡市教育委員会

# 博 多 62

— 博多遺跡群第90次発掘調査概報 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第557集



遺跡略号 HKT-90  
遺跡調査番号 9519

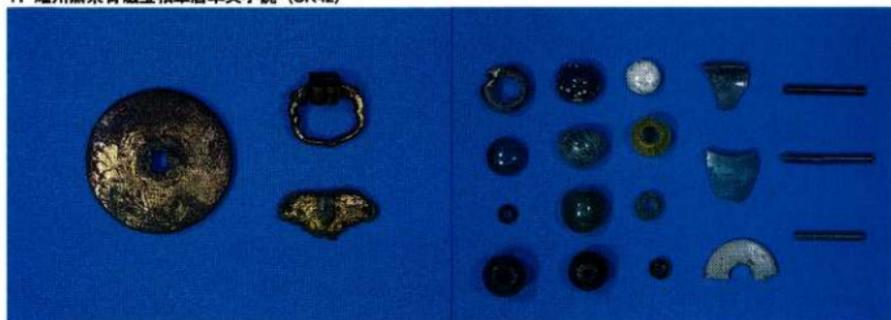
1998

福岡市教育委員会



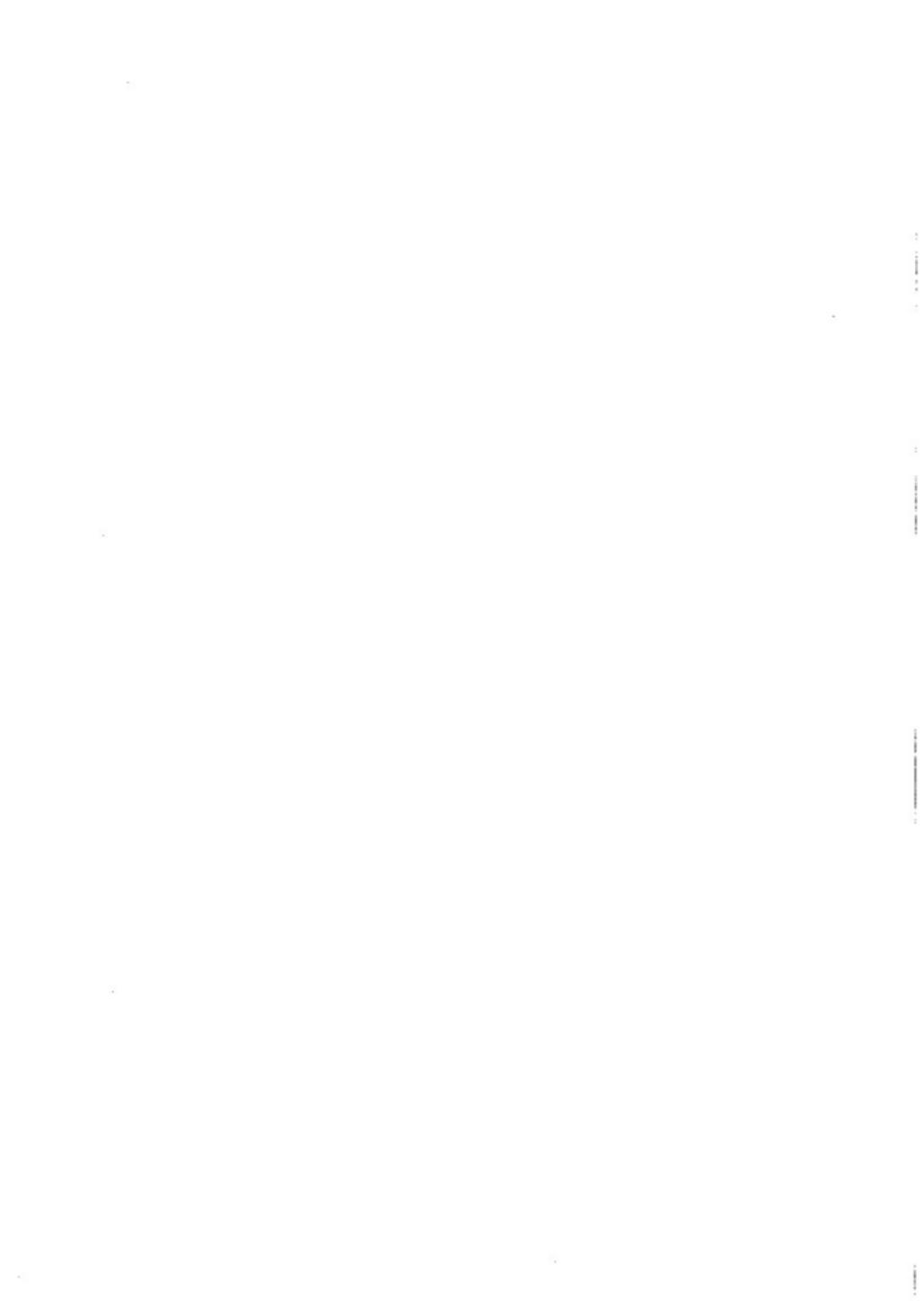


1. 耀州窯系青磁宝相草唐草文小碗 (SK42)



2. 金銅製飾金具

3. ガラス製品



## 序

古くから大陸文化の門戸として栄えた都市遺跡「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに100次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は共同住宅建設に伴って実施された第90次調査の概要を報告するものです。国際貿易都市「博多」の繁栄を示す輸入陶磁器の出土等、大変興味深い成果を取っています。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた施主の新築住宅の方々を始めとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

## 例 言

1. 本書は共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成7(1995)年度に発掘調査を実施した福岡市博多区冷泉町216所在の博多遺跡群第90次調査の報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測、撮影は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎があたった。遺物の実測はSE39・SK65・75出土遺物、墨書陶磁器を古閑真理子、吉田恵美が行い、他の実測および撮影は佐藤が行った。但し、古瓦の実測・製図・拓影・撮影およびそれに関する原稿の執筆は福岡市教育委員会埋蔵文化財課の瀧本正志が行った。
3. 製図は藤村佳公恵、佐藤が行った。
4. 本書の執筆・編集は佐藤が行った。
5. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

調査番号	9519		遺跡略号	HKT-90	
調査地地籍	福岡市博多区冷泉町		分布地図番号	天神49	
開発面積	1,068m <sup>2</sup>	対象面積	476m <sup>2</sup>	調査面積	312m <sup>2</sup>
調査期間	1995(平成7年)6月15日～10月31日				

# 本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査の組織	1
II	発掘調査の概要	3
III	遺構と遺物	6
1	検出遺構	4
2	出土遺物	10

# 挿図目次

第1図	博多遺跡群発掘調査地域図	2
第2図	博多遺跡群第90次調査地域周辺図	3
第3図	博多遺跡群第90次調査遺構配置図(1/200)	4
第4図	博多遺跡群第90次調査西壁土層実測図	5
第5図	井戸実測図(1)	7
第6図	井戸実測図(2)	8
第7図	土壌・ビット状遺構・道路状遺構実測図	9
第8図	S D15~17・S E32出土遺物実測図	10
第9図	S E39出土遺物実測図	11
第10図	S K65出土遺物実測図(1)	12
第11図	S K65出土遺物実測図(2)	13
第12図	S K65出土遺物実測図(3)	14
第13図	S K75・S X84出土遺物実測図	15
第14図	S K74出土遺物実測図	17
第15図	その他の遺構・包含層出土遺物	18
第16図	墨書陶磁器実測図(1)	19
第17図	墨書陶磁器実測図(2)	20
第18図	銅銭拓影	20
第19図	瓦実測図(1)	21
第20図	瓦実測図(2)	23

## 図 版 目 次

- 図版 1 (1) 博多遺跡群第90次調査南側調査区Ⅰ層上面 (北西から)  
(2) 博多遺跡群第90次調査南側調査区Ⅱ層上面 (北西から)  
(3) 博多遺跡群第90次調査南側調査区Ⅲ層上面 (北西から)  
(4) 博多遺跡群第90次調査北側調査区Ⅱ層上面 (南東から)  
(5) 博多遺跡群第90次調査北側調査区Ⅲ層上面 (南東から)  
(6) 博多遺跡群第90次調査北側調査区Ⅳ層上面 (南東から)
- 図版 2 (1) S E 32井戸 (南から) (2) S E 32井戸土層 (北から)  
(3) S E 39井戸 (北東から) (4) S E 52井戸土層 (北西から)  
(5) S E 56井戸土層 (北西から) (6) S E 56井戸 (南から)  
(7) S E 76井戸 (北西から) (8) S E 67井戸土層 (南東から)
- 図版 3 (1) S E 69・70井戸 (南西から) (2) S E 69井戸土層 (北東から)  
(3) S E 69井戸土層 (北東から) (4) S E 70井戸土層 (南東から)  
(5) S E 73井戸 (南西から) (6) S E 73井戸土層 (北東から)  
(7) S F 46道路土層 (南西から) (8) S F 46道路土層 (南西から)
- 図版 4 (1) S F 46道路土層 (西から) (2) S D 88溝 (北西から)  
(3) S K 91土壌土層 (西から) (4) S K 76土壌土層 (北西から)  
(5) Pit 143土層 (北東から) (6) S K 85土壌土層 (南東から)  
(7) Pit 135土層 (南から)
- 図版 5 (1) S K 01土壌 (南東から) (2) S K 10土壌 (北西から)  
(3) S K 74土壌 (北東から) (4) S K 74炉 (南から)  
(5) S K 74土層 (北東から) (6) S K 93土壌石灰出土状況 (北から)  
(7) S X 84 (北西から) (8) Pit 254 (東から)

# I はじめに

## 1 調査にいたる経過

1992（平成4）年10月13日、株式会社伏見屋から本市に対して博多区冷泉町216他3筆におけるビジネスホテル建設工事に伴う埋蔵文化財の事前審査の申請がなされた。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多浜のほぼ中央に位置し、ビル建設に伴う第44次調査区の南西に位置する平地である。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて1992（平成4）年10月29日と11月10日に試掘調査を実施した。調査の結果、現地表下200cmまでは客土（真砂）ないし近代以降の造成土（暗黄褐色土）が堆積し、現地表下260cmで確認された地山の明黄褐色砂との間に中世を中心とした時期の遺物包含層を確認、各層上面で遺構を検出した。その後施主が新栄住宅株式会社に代わり、開発目的も共同住宅建設に変更となった。新栄住宅株式会社と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積1,068.68㎡の内工事で破壊を受ける建物部分476㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。新栄住宅株式会社と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は1995（平成7）年6月15日から10月31日まで行われた。

## 2 調査の組織

**調査委託** 新栄住宅株式会社

**調査主体** 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

**調査総括** 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

第2係長 山口譲治

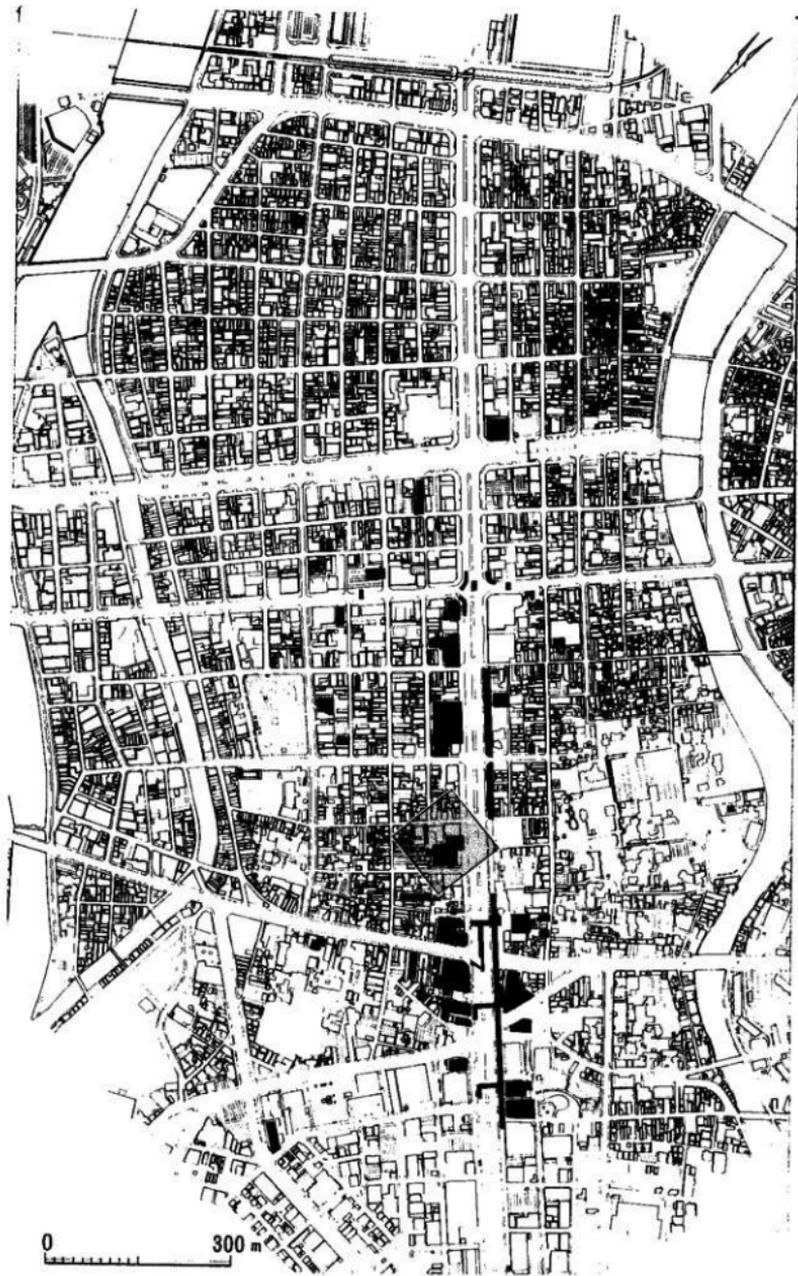
**庶務担当** 西田結香（前任） 河野淳美

**調査担当** 試掘調査 荒牧宏行

発掘調査 佐藤一郎

**発掘調査・資料整理協力者** 尾花憲吾・楠本純次・柴田博・中村米重・宮崎智祥・伊藤美伸・大浜葉緒・尾崎真佐子・河津信子・桑原美津子・古賀美恵子・為房紋子・津川真千代・西村雅実・早川見代・播磨博子・福田友子・藤野洋子・藤原直子・山口慶子・萬スミヨ・吉住シヅエ・相川和子・田中ヤス子・藤野邦子・藤村佳公恵

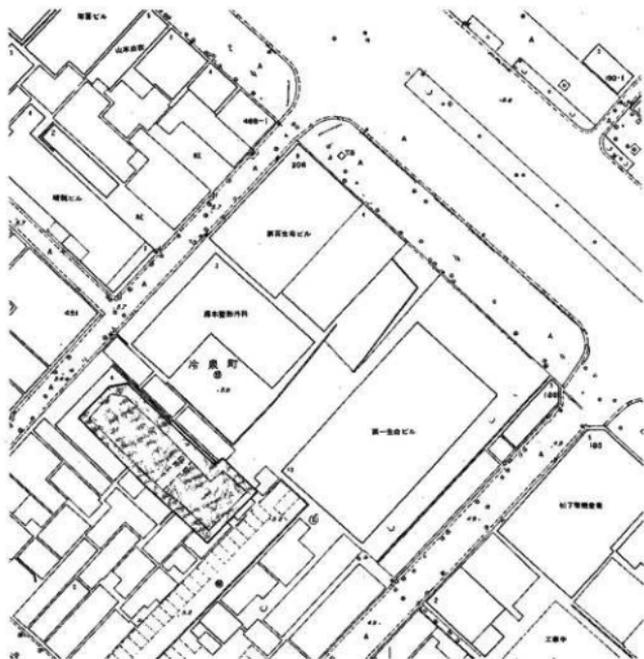
その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について新栄住宅株式会社をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。



第1圖 博多遺跡群発掘調査地域図

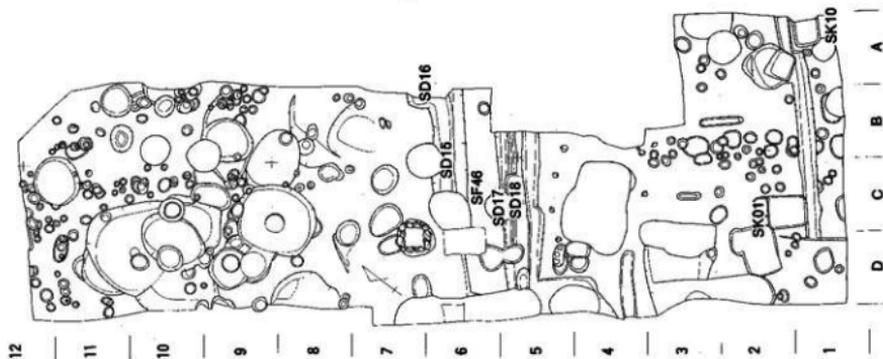
## Ⅱ 発掘調査の概要

博多遺跡群第90次調査区は博多浜のほぼ中央部分に位置し、標高5m前後を測る。第44・62次調査区の南西、第22次調査区の西、その付近が鎮西探題推定地とされる櫛田神社の北東に位置する。現況は家屋解体後アスファルト舗装された駐車場となっていた。調査は6月15日にバックホーによって現地表下3mまで及ぶ客土・造成土を取り除き、その下面から層位を大きく3層に分け(第4図参照)、各層の上面で遺構の検出にあたった。排土は地山面まで深く膠しい土量予想され残された調査対象区域外を加えても申請区域内での処理は困難であり、一部外部へ搬出し調査区を南東と北西に分け先に南東側から調査を行った。各層の時期は第Ⅰ層(灰褐色砂、標高約2.5m)が11世紀後半から12世紀前半、第Ⅱ層(暗黄褐色砂、同2m)が9世紀後半から11世紀前半、第Ⅲ層(明黄褐色砂、同1.5m)が8世紀である。第Ⅰ層上面では井戸2基、溝3条、道路遺構、土壇数基、柱穴多数を検出したが、遺構の時期は13世紀後半から15世紀前半に及ぶ。道路遺構SF46は13世紀後半以降に普請されたもので、第62次調査で検出された聖福寺側から南西に延びる道路遺構の延長に相当する。第Ⅱ層上面では井戸6基、土壇・柱穴多数を検出したが、Ⅰ層上面で検出漏れした遺構も含んでいる。第Ⅲ層上面では土壇・柱穴多数、溝1条を検出した。調査は埋め戻しも含めて、10月31日に終了した。

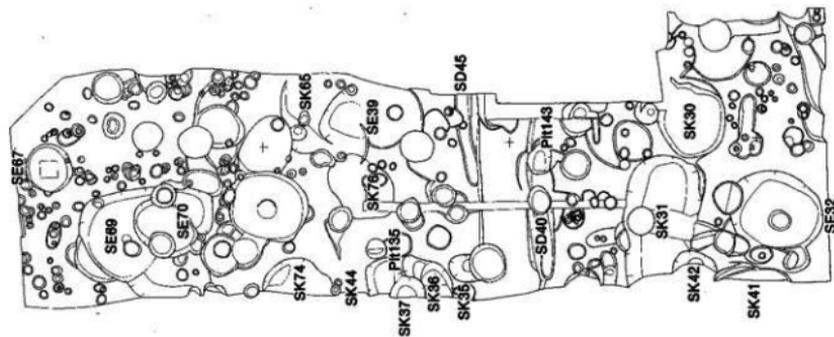


第2図 博多遺跡群第90次調査地域周辺図

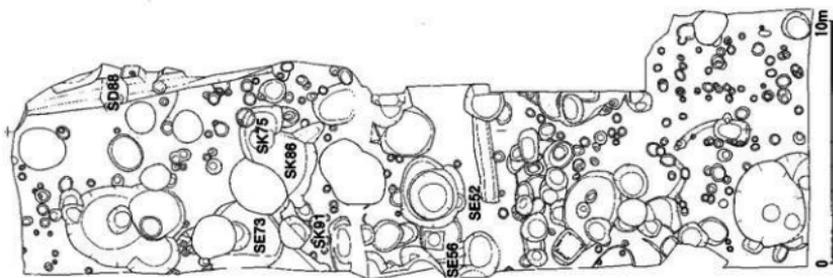
— I層上面



— I層上面



— I層上面



第3図 博多通商研第90次調査通商配置図 (1/200)



### Ⅲ 遺構と遺物

#### 1 検出遺構

##### 井戸

SE32 (第5図、図版2) D・C-2区Ⅱ層上面で検出した。掘り方は上面径3.5mの略円形を呈し、深さは1.8m、底面の標高0.2mを測る。断ち削りの際、2基の切り合いを確認した。Ⅵ層以下が最初に掘られた井戸掘り方の埋土である。完掘時に基底部南側でさらに井戸枠を検出した。最初に確認した井戸枠には基底部中央に掘えられた上端径70cm、下端径60cm、深さ40cmの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。

SE52 (第5図、図版2) D・C-7・6区Ⅲ層上面で検出した。掘り方は上面径2.6mの略円形を呈し、深さは1.3m、底面の標高0.5mを測る。土層を観察する限り井戸枠は確認されなかった。SE56を切る。

SE56 (第5図、図版2) D-6区Ⅲ層上面で検出した。掘り方は上面径1.7mの略円形を呈し、深さは1.0m、底面の標高0.2mを測る。井戸枠の構造は上部に70×80cmの方形に組んだ残存高0.3mの板材の痕跡、下部には径50cm、深さ5cmの曲物の残欠とみられる木質が残存していた。SE52、SK35・36に切られる。

SE67 (第6図、図版2) 調査区の北端C-12区Ⅱ層上面で検出した。掘り方は上面径2.0mの略円形を呈し、深さは2.1m、底面の標高0.6mを測る。70×70cm、残存高1.5mの方形の枠材の痕跡、底部には径50~55cm、深さ70cmの曲物の残欠とみられる木質が残存していた。

SE69 (第6図、図版3) D・C-10・11区Ⅱ層上面で検出した。掘り方は上面径3.3mの略円形を呈し、深さは2.1m、底面の標高0.6mを測る。基底部のやや南西に上端径60cm、下端径60cm、深さ0.8mの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。SE70に切られる。

SE70 (第6図、図版3) D・C-10区Ⅱ層上面で検出した。掘り方は上面径2.6mの略円形を呈し、深さは1.5m、底面の標高-0.1mを測る。基底部の西側に上端径55cm、下端径55cm、深さ0.9mの桶側の残欠とみられる木質が残存していた。SE69を切る。

土壌 炭を多く含んだ堆積状況、他の遺構や包含層層からのガラス製品やその埴塼陶器片の出土状況から、ガラス製造関係の廃棄土壌とみられる。SK-74・93 (図版5) 出土石灰はその原材料か。

SK44 (第7図) 調査区の西端中央D-7区Ⅱ層上面で検出した。平面形は不整隅丸方形を呈し、西側は調査区域外に延びる。全長150cm以上、幅145cm、深さ60cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。SK37に切られる。

SK85 (第7図、図版4) B-11区Ⅱ層上面で検出した。平面形は不整形を呈する。径95~105cm、深さ80cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。

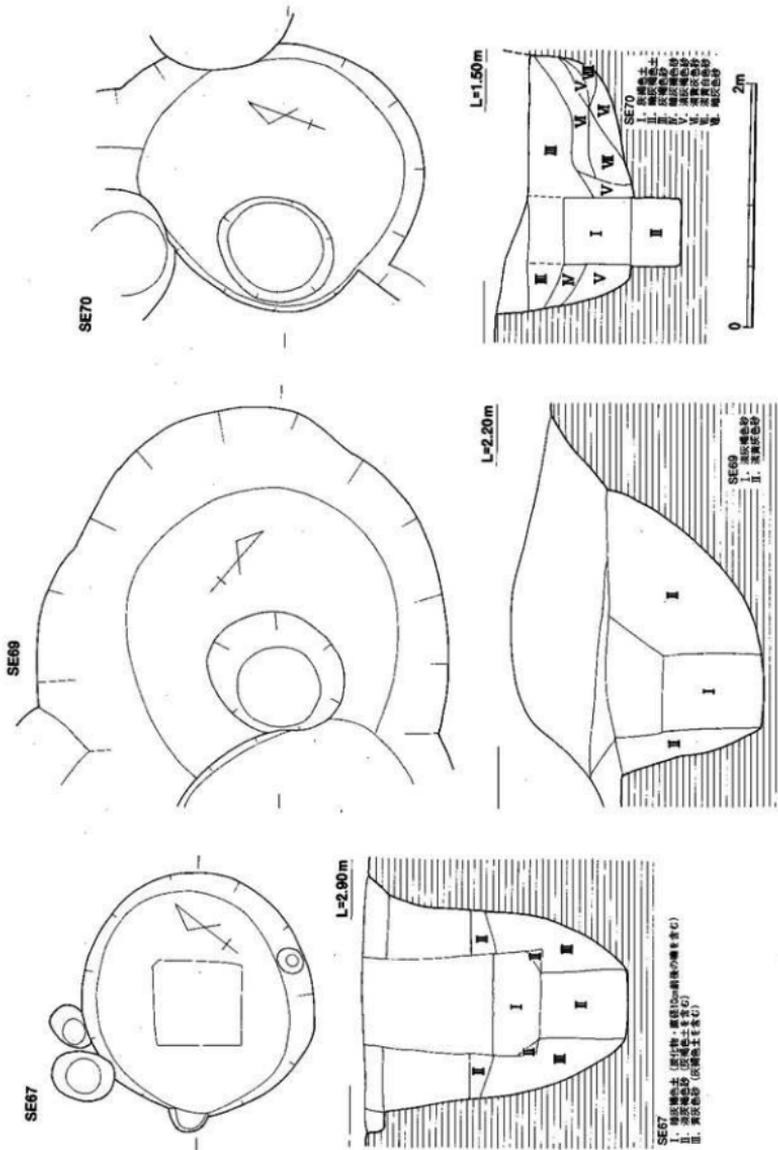
SK91 (第7図、図版4) D-8区Ⅲ層上面で検出した。平面形は不整形を呈する。径120~135cm、深さ95cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

PR135 (第7図、図版4) D-7区Ⅱ層上面で検出した。平面形は不整形円形を呈する。SK44他に切られる。残存長1.4m、幅1.0m、深さ1.1mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。

PR136 (第7図) C-11区 層上面で検出した。平面形は不整形を呈する。径1.0m、深さ65cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

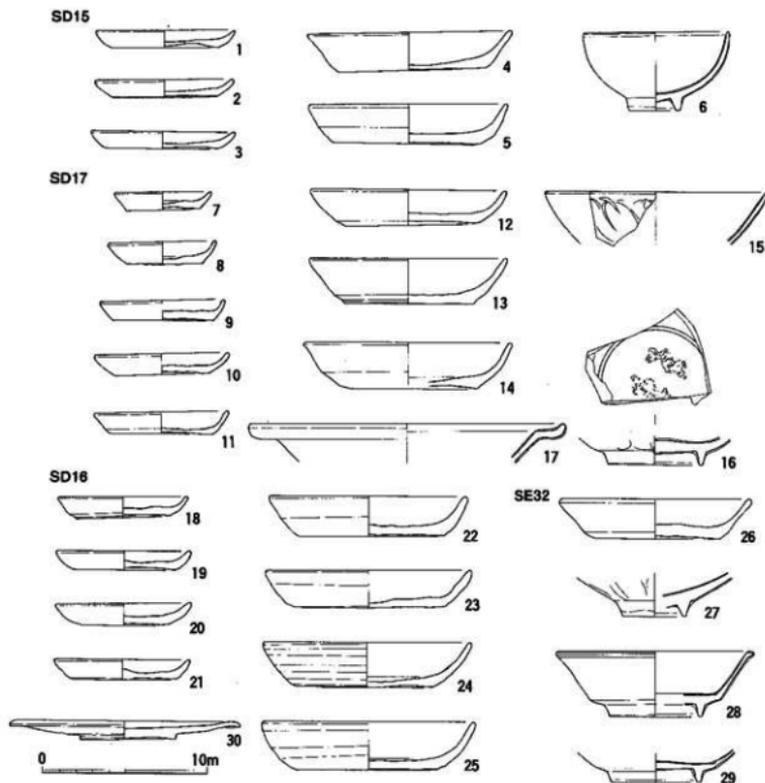
PR143 (第7図、図版4) 調査区の東端中央のやや南B-5区で検出した。東側は攪乱を受けている。平面形は不整形を呈する。径1.3~1.4m、深さ1.5mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。





第6图 井戸渊图(2)





第8図 SD15~17・SE32出土遺物実測図

道路遺構SF46 (第7図、図版3) 6区I層上面で検出した偶溝SD15~16を伴う道路遺構である。  
埋納遺構SX84 (第7図、図版5) C-11区II層上面で検出した。平面形は不整形円形を呈する。  
径30~35cm、深さ10cmを測る。土師器小皿が合わせ口で6組、長瓶1が埋納されていた。

## 2 出土遺物

**SD15出土遺物** (第8図、図版6) 他に土製人物像 (図版6-31布袋・32女兒) が出土した。

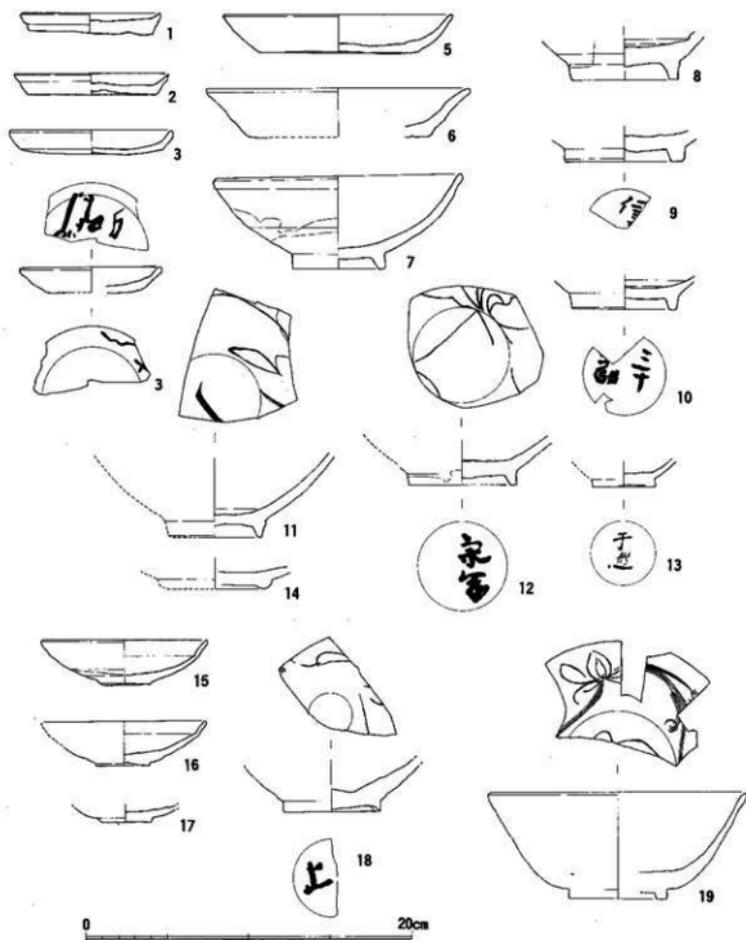
**土師器** 底部は糸切履しにより、体部外面から内底まで横ナアされる。

**小皿 (1~3)** 口径8.5~8.8cm、器高1.0~1.1cm、底径6.6~6.7cmを測る。

**杯 (4・5)** 口径12.2・12.5cm、器高2.4・2.5cm、底径9.2・9.1cmを測る。

**龍泉窯系青磁 小碗 (6)** 半球形の体部の小碗Ⅲ-1・a類である。

**SD17出土遺物** (第8図、図版6)



第9図 SE39出土遺物実測図

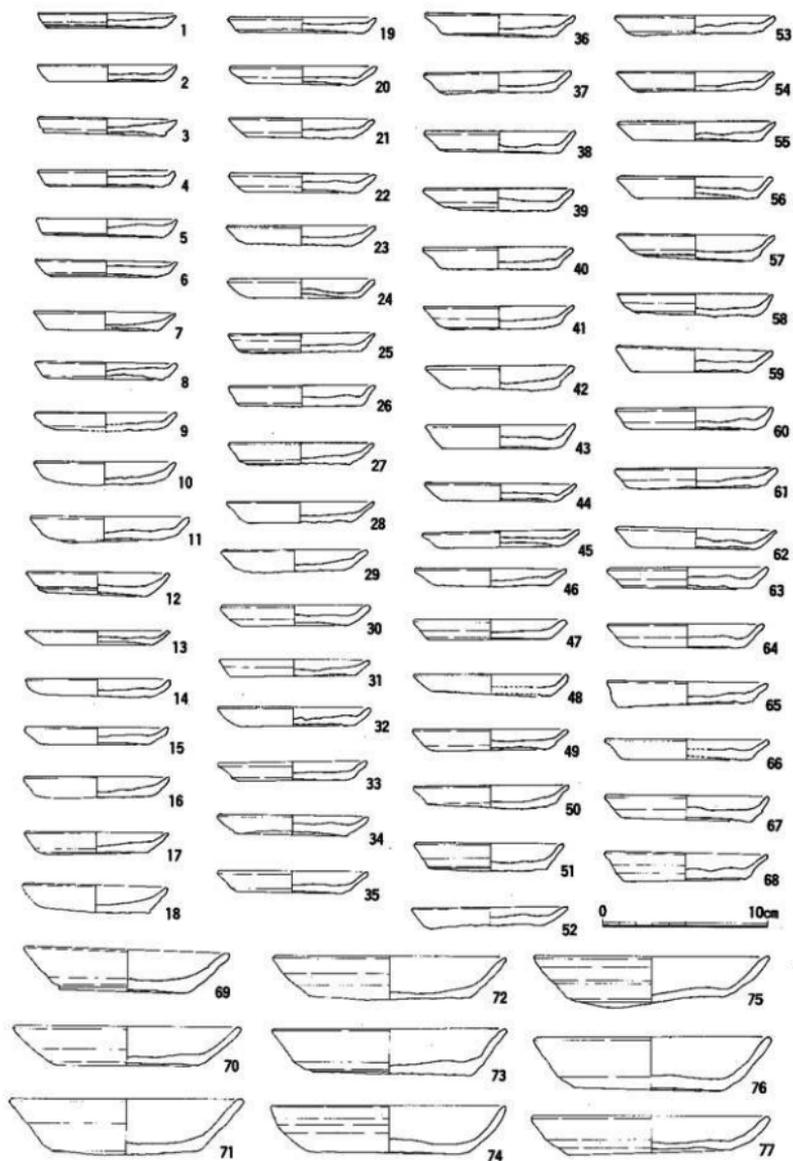
土師器 底部は糸切離しにより、体部外面から内底まで横ナデされる。

特小皿 (7・8) 口径6.1・6.7cm、器高1.1・1.4cm、底径4.4・4.5cmを測る。

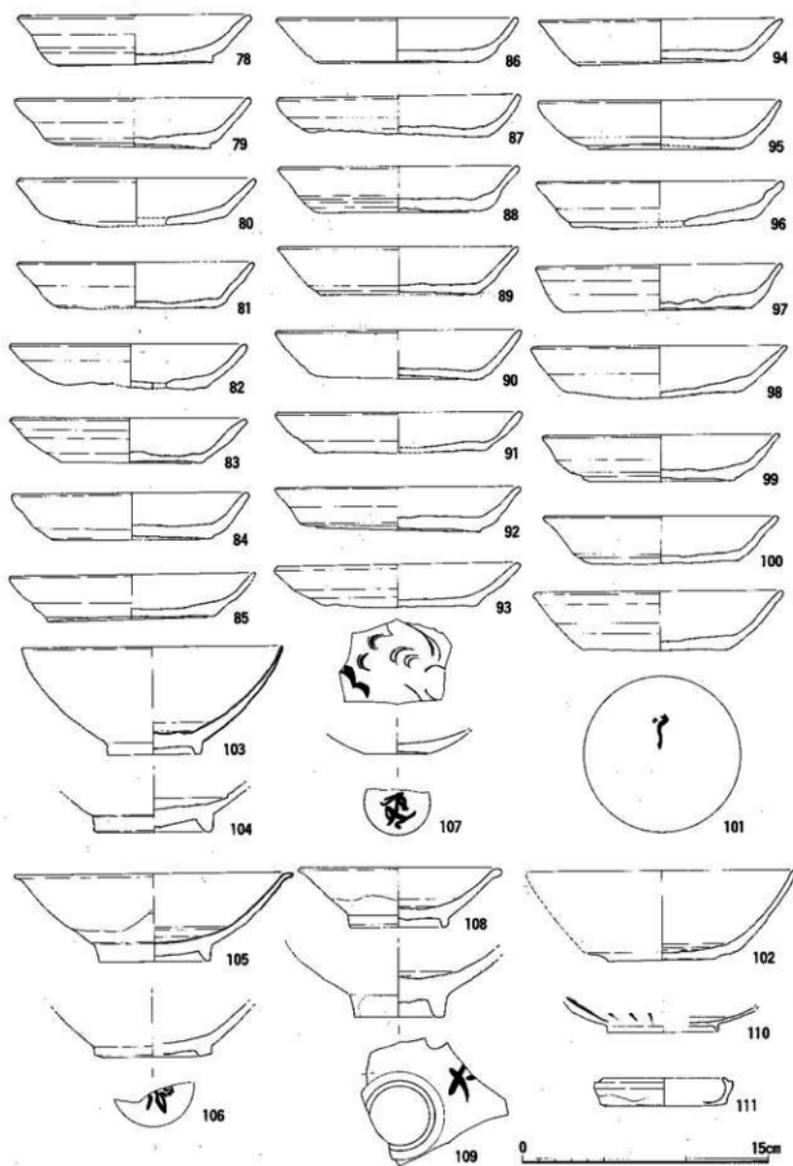
小皿 (9-11) 口径7.7-8.3cm、器高1.2-1.2cm、底径5.6-6.3cmを測る。

杯 (12-14) 口径12.0-12.8cm、器高2.1-2.8cm、底径7.9-8.0cmを測る。

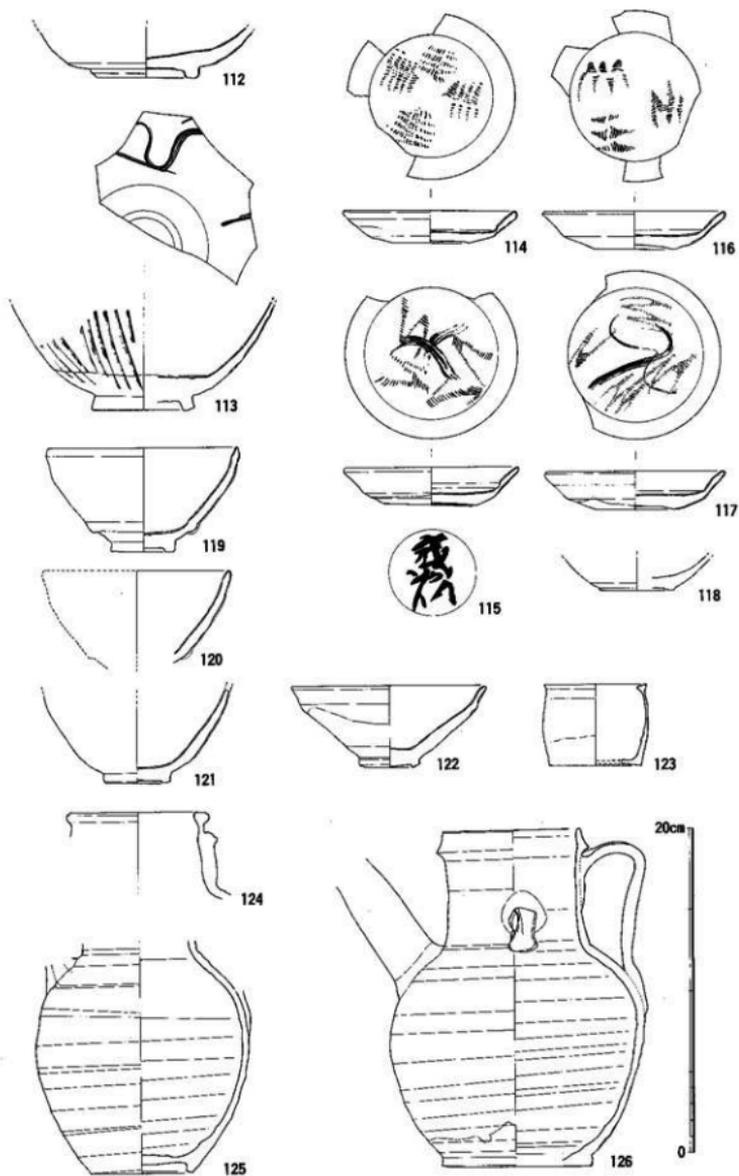
龍泉窯系青磁



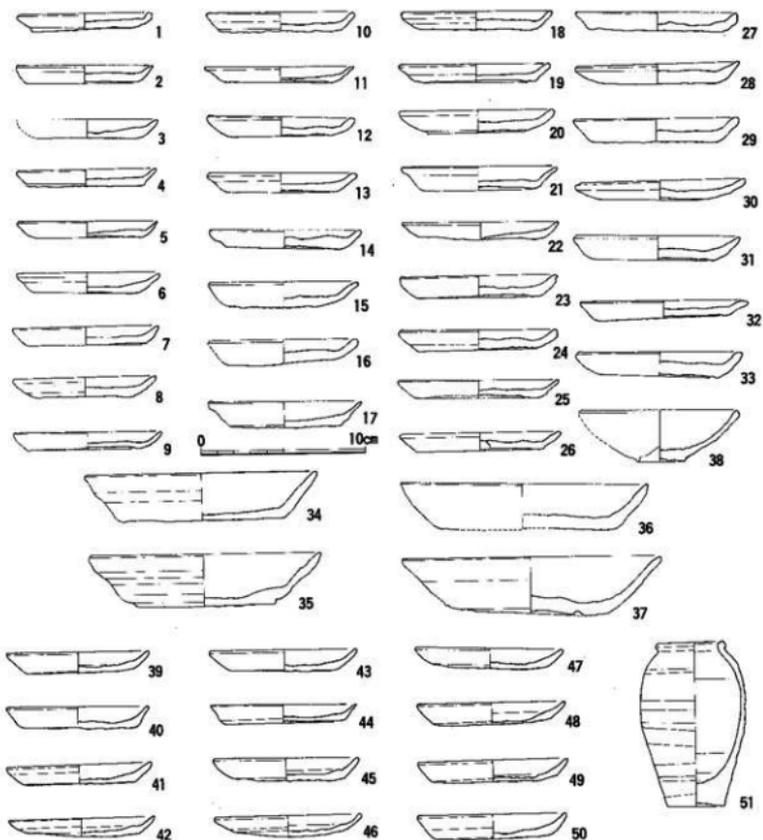
第10图 SK65出土遗物实测图(1)



第11图 SK65出土遗物实测图(2)



第12图 SK65出土遗物实测图(3)



第13図 SK75・SX84出土遺物実測図

碗 (15) 体部外面に細長い蓮弁を削り出す碗Ⅲ-2類である。

杯 (16) 内底に双魚文を配した杯Ⅲ-4類である。

盤 (17) 口縁端部を直上に引き出す。

SD16出土遺物 (第8図、図版6)

土師器 底部は糸切離しにより、体部外面から内底まで横ナデされる。

小皿 (18~21) 口径7.9~8.2cm、器高1.2~1.3cm、底径5.0~6.2cmを測る。

杯 (22~25) 口径12.2~13.0cm、器高2.4~2.9cm、底径8.4~9.2cmを測る。

SE32出土遺物 (第8図、図版6)

土師器 杯 (26) 底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみら

れる。口径11.7cm、器高2.5cm、底径7.6cmを測る。

#### 龍泉窯系青磁

碗(27) 碗Ⅲ-2類の底部片である。

杯(28・29) 体部下位が鋭く屈曲する杯Ⅲ-1類である。

緑釉陶器 皿(30) 円盤状の高台から体部がほぼ水平にのび、口縁部はやや外反する。

#### SE39出土遺物(第9図)

土師器 底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿(1~4) 口径8.5~10.0cm、器高1.2~1.5cm、底径7.5~8.8cmを測る。

杯(5・6) 口径13.9・16.0cm、器高2.4・3.0cm、底径9.2・10.8cmを測る。

#### 白磁

碗(7~13) 7は碗Ⅱ類、8~10は碗Ⅲ類で、9・10の外底にはそれぞれ墨書「信□」、「三十□郎」が記されている。11~14は碗Ⅳ類で、12の外底には墨書「宋□」が記されている。

皿(15~17) 皿Ⅵ-1a類である。

青白磁 碗(18) 外底に墨書「上□」が記されている。

龍泉窯系青磁 碗(19) 内面に畫花文を片彫りする碗Ⅰ-2類である。

#### SK65出土遺物(第10~12図、図版7)

土師器 底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿(1~68) 口径8.4~9.9cm、器高1.1~1.7cm、底径6.2~7.5cmを測る。

杯(69~101) 口径12.5~15.3cm、器高2.6~3.7cm、底径7.7~9.3cmを測る。

碗(102) 焼成は堅緻でほとんど陶質である。色調は橙色を呈する

#### 白磁

碗(103~106) 103は碗Ⅱ-2類、104・105は碗Ⅲ-3類に属する。

皿(107~108) 107はやや上げ底の底部外面に墨書が記されるが、判読困難である。108は105(碗Ⅳ-3類)を浅く小型化した高台付皿である。

#### 青白磁

皿(110) 器内は薄く、体部外面に放射状に条線を施す。

合子(111) 体部外面は無文で、口縁部は内傾する。

#### 青磁

碗(112・113) 112は内外面無文の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1類で、内底見込みに目跡が4点みられる。113はヘラ状の施文具により体部外面に条線、内面に略花文を片彫りする。内底見込みには輪状の目跡がみられる。

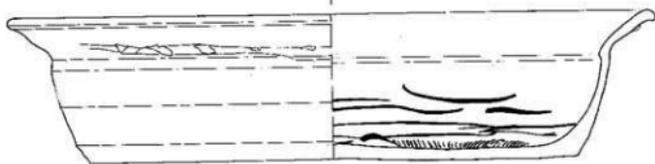
皿(114~117) 平坦な内底見込みに之字形点線文を配した同安窯系青磁皿Ⅰ-1・b類である。

#### 黒釉陶器

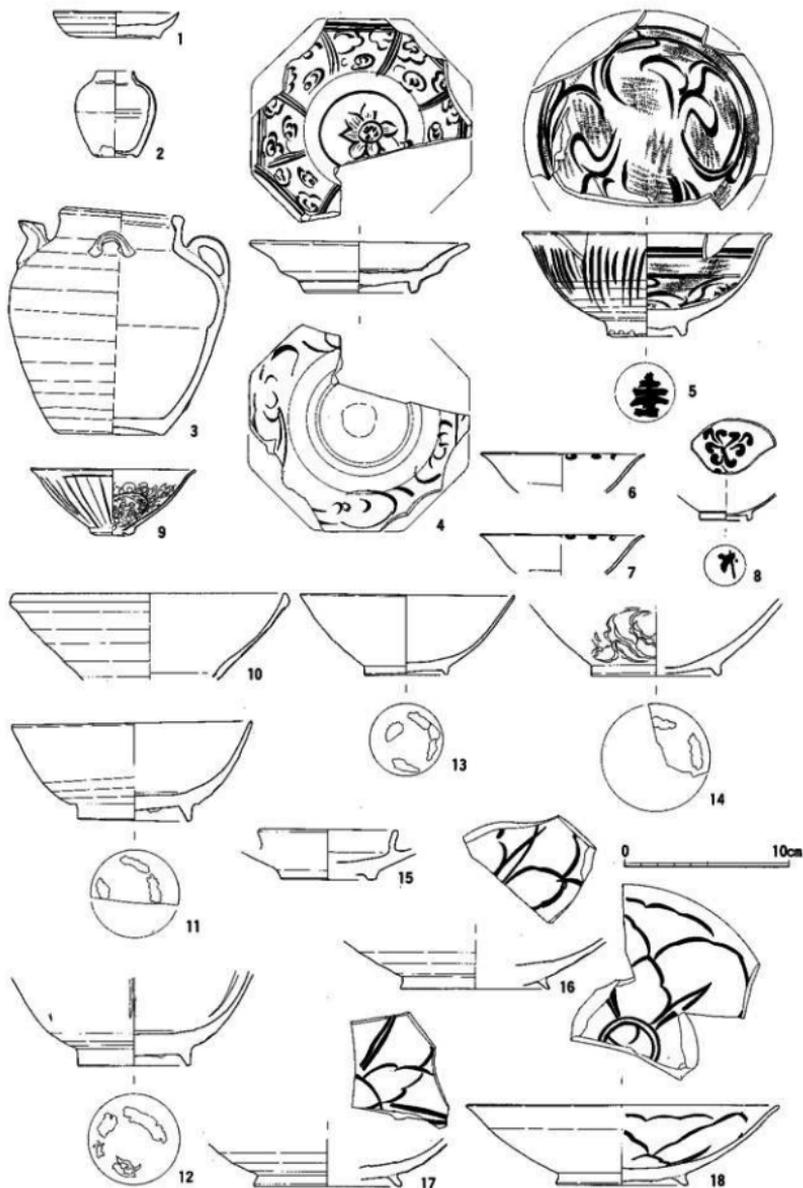
碗(120~122) 東口の天目茶碗で、口縁下で屈曲し、直下内面はわずかにくぼむ。内底部は平坦である。

小壺(123) 断面三角形の口縁の端部を平坦にし、内傾させる。

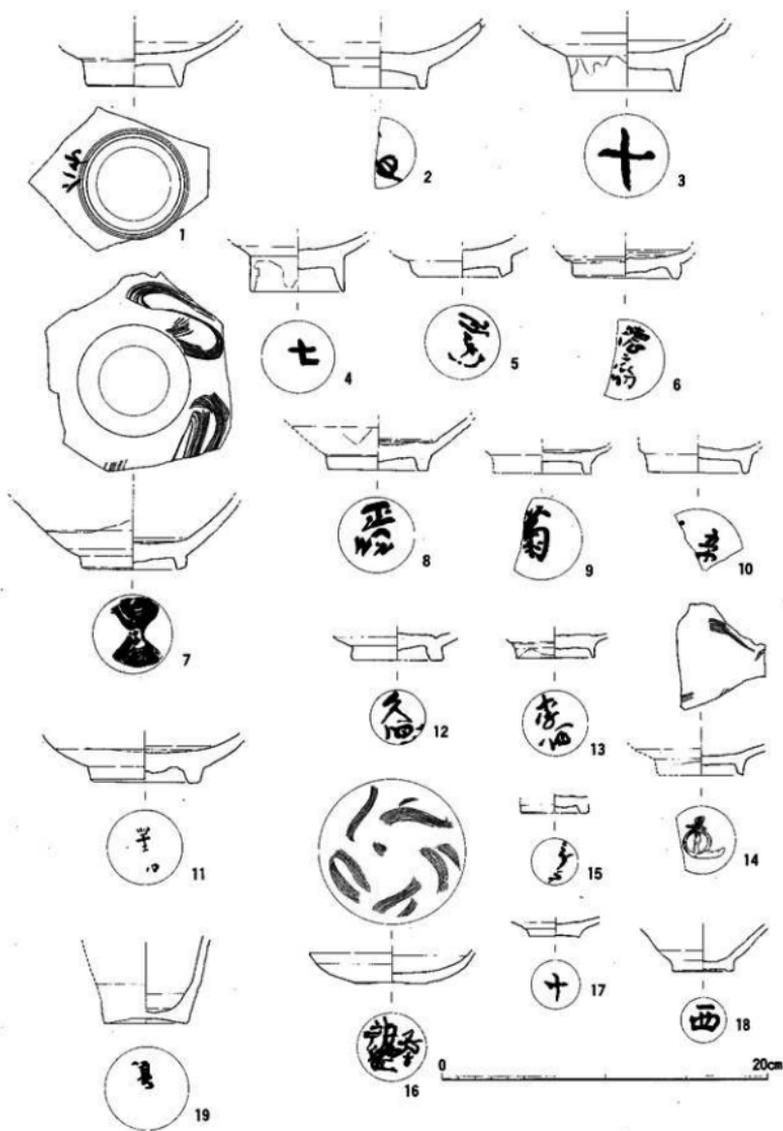
陶器 水注(124~126) 126は直立する頸部に内傾するくの字口縁が付く。体部外面下半は回転ヘラ削り、上半から内面は回転横ナデ調整される。注口先端部は欠失。胎土は赤褐色、釉は黒褐色を呈する。



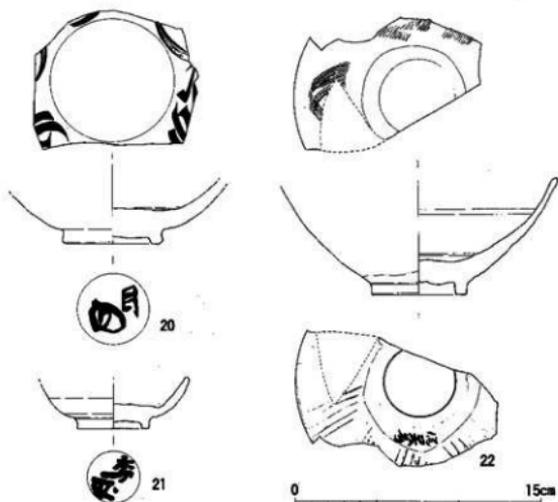
第14图 SK74出土遺物実測图



第15図 その他の遺構・包含層出土遺物



第16图 墨书陶磁器实测图(1)



第17図 墨書陶磁器実測図(2)

SK75出土遺物(第13図)土師器の他、平底の陶器皿(38)が出土した。

土師器 底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

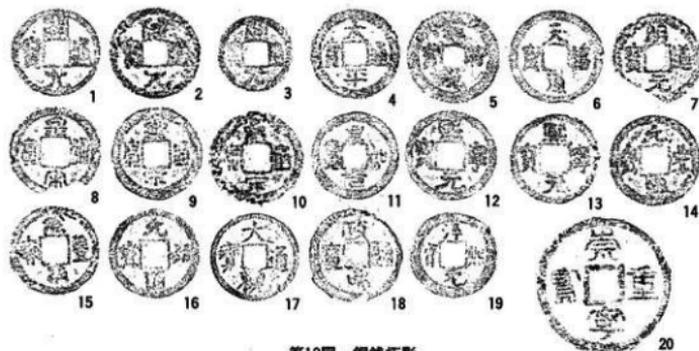
小皿(1~33) 口径8.3~9.9cm、器高0.9~1.5cm、底径6.2~7.2cmを測る。

杯(34~37) 口径14.2~15.7cm、器高2.9~3.5cm、底径9.4~10.5cmを測る。

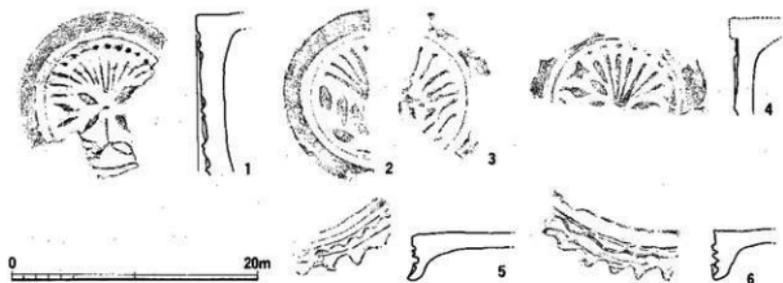
SX84出土遺物(第13図、図版7)

土師器 底部はヘラ切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿(39~50) 口径8.7~9.2cm、器高1.2~1.6cm、底径6.6~7.0cmを測る。



第18図 銅銭拓影



第19図 瓦実測図(1)

陶器 長瓶 (38) 断面四角形の折り返し口縁がつく。底部付近が回転ヘラ割り、他は横ナア。

SK74出土遺物 (第14図、図版7)

陶器 盤 平坦な底部に鈎形口縁の晋江磁甕窯黄釉鉄絵盤である。内面は右反りの幹枝が外周からのび、内底中央に楕円、その内側に花糸と葯からなる雄蕊、周囲に線描きで心葉形の花弁を表している。更に外側にも粗雑に花弁を表現する。見込みの円周に内接する正方形と円の間は羽状文で埋められている。意匠的には博多遺跡群第36次調査SK217出土資料と福岡市城南区京の隈経塚出土資料の間に位置する。内外面とも口縁下まで白化粧を施し、端部付近には目跡が残る。外底部に墨書「林小口郎」、その逆方向から「謝」が記される。

その他遺構・包含層出土遺物 (第15図、図版6～8)

瑠璃釉小壺 (2) 平底倒卵形の体部に短く内傾する口縁部がつく。端部は細くおさまられている。SK01から出土で、土師器小皿 (1)、金銅製壺 (巻頭図版) が共伴している。

褐釉陶器水注 (3) 胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。漆黒～褐色の釉が底部付近までかけられている。SK10出土。

龍泉窯系青磁八角皿 (4) 3本の凹線を口縁下内面にめぐらし、凹線により体部内面を8分割し、その間、体部外面に略花文、内底見込みに花卉、その中心に「吉」字を配する。全面施釉の後、高台内の釉を輪状にかき取っている。Pit50出土。

青磁 碗 (5) 丸みを持つ体部から口縁部が外反してのびる。ヘラ状の施文具により体部外面に放射状に条線、内面は口縁下に2条の凹線をめぐらし、体部は略花文を片影りしその間に之字形点線文を配する。C-6区I層から出土。

白磁黒花 小碗 (6～8) 釉下に化粧土がかけられた磁州窯系の小碗である。口縁下内面、内底部に花文が黒褐色で配される。器内は薄く、外反する口縁の端部は細くおさまられている。8の細く低い高台の内側には墨書が記されるが、判読困難である。6がD-7区I層、7・8 (接合はできないうが、同一個体とみられる。)はD-6区II層からの出土。

耀州窯系青磁 小碗 (9) 体部は内湾気味にのび、口縁下から外反し口縁端部は細くおさまられている。内面には宝相華唐草の印花文、外面には放射状に沈線配する。器内は薄く、断面逆台形の高台はやや小さめで、端部は外側に跳ねる。オリブ緑色の釉を全面に施した後、盪付の釉をカキ取り、露胎とする。II層上面、調査区南端で遺構の一端が検出されたSK42からの出土で、底部ヘラ切り難しの土師器片、白磁碗II類片が共伴している。

白磁碗(10)以下18まで主として五代末から北宋初めの陶磁器の一群である。緻密な胎土、透明釉の碗ⅠⅠ類で、D-12区Ⅱ層からの出土。

越州窯系青磁 オリーブ色の釉が全面に施されている。

碗(11-14・16-18) 11・12は外面を直、内面を斜めに削り出すやや細い高台から丸みを持った体部が延びる。高台内側には目跡がみられる。11の口縁部は体部からほぼ直線的にのびる。Pit331出土。12は体部外面に縦方向の沈線を入れ、体部を区割りする。口縁部は欠失しているが、輪花を持つとみられる。B-10区Ⅱ層出土。13・14の体部は丸みを持ち、断面逆台形の高台はやや小さめで、端部は丸みを持つ。13は口縁部がほぼ直線的にのびる。D-2区Ⅲ層出土。14は体部外面に片彫りによる文様が施されているが、釉の発色不良で不鮮明である。D-6区Ⅱ層出土。15は托で、SK47出土。16-18は撥状の貼り付け高台をもった浅めの碗である。見込み全面に花卉文を片彫りする。高台内に目跡が残る。16がB-11区Ⅱ層、17がC-11区Ⅱ層、18はPit75からの出土。

墨書陶磁器(第16・17図)

1-6は白磁碗Ⅴ類片で、1(D-5区Ⅰ層出土、以下出土層位、遺構を示す。)は高台外側脇に「仁与」、高台内に、2(SK35)・5(B-5区Ⅰ層)は墨書が記されるが判読不明、3(D-4区Ⅱ層)は「十」、4(D-7区Ⅰ層)は「七」、6(A-3区Ⅱ層)は「徳□綱」と記される。7-11は白磁碗Ⅵ類片で、高台内の墨書は8(D-5区Ⅰ層)が「正綱」かと判読出来る他は不明。(7はD-4区Ⅰ層、9はD-6区Ⅰ層、10・11はD-5区Ⅰ層から出土。)12・13は白磁碗Ⅶ類片で高台内に、12(B-5区Ⅰ層)は「久綱」、13(C-7区Ⅰ層)は「李綱」と記される。14(B-6区Ⅱ層)・15(C-7区Ⅰ層)は白磁高台付皿片で高台内の墨書は判読不明。16(C-7区Ⅰ層)は白磁皿Ⅲ-1類で外底部に墨書が記されるが判読不明、17(B-7区Ⅱ層)は白磁皿Ⅵ-1a類で外底部に「十」と記される。18(B-12区Ⅱ層)は黒釉陶器碗片で高台内に「西」と記される。19(D-4区Ⅰ層)は陶器瓶底部片で外底部に墨書が記されるが判読不明。20(D-5区Ⅰ層)・21(SK40)は龍泉窯系青磁碗で、高台内の墨書は、碗Ⅰ-2類の20が判読不明、無文の碗Ⅰ-1類の21は「李綱」としるされる。22(D-4区Ⅰ層)は同安窯系青磁Ⅲ-2類で、高台外側脇に墨書が記されるが判読不明。

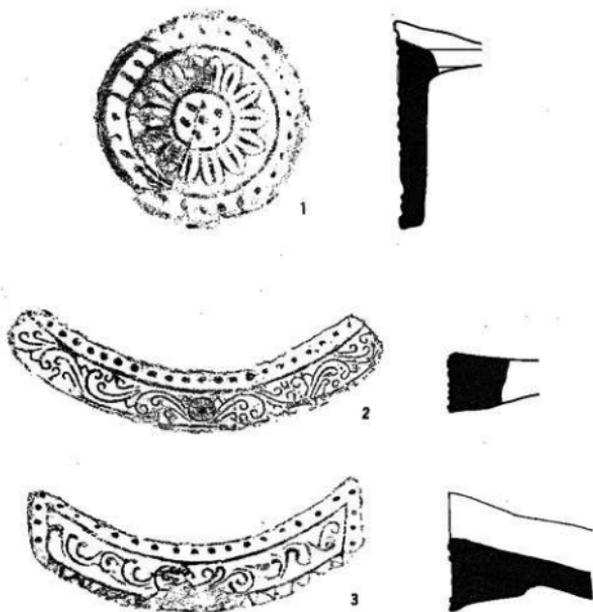
銅錢(第18図)主としてⅠ・Ⅱ層からの出土である。

1-3は開元通寶(初鑄年621年、以下初鑄年を記す。)、4は太平通寶(976-924)、5は祥符元寶(1008)、6は天禧通寶(1017-1021)、7は明道元寶(1032)、8-10は皇宋通寶(1039)、11は至和元寶(1054-1055)、12は熙元通寶(1068)、13は熙寧元寶(1068-1077)、14・15は元豊通寶(1078)、16は元祐通寶(1086-1093)、17は崇寧重寶(1102-1106)、18は大觀通寶(1107)、19は政和通寶(1111-1117)、20は淳熙元寶(1174-1190)である。

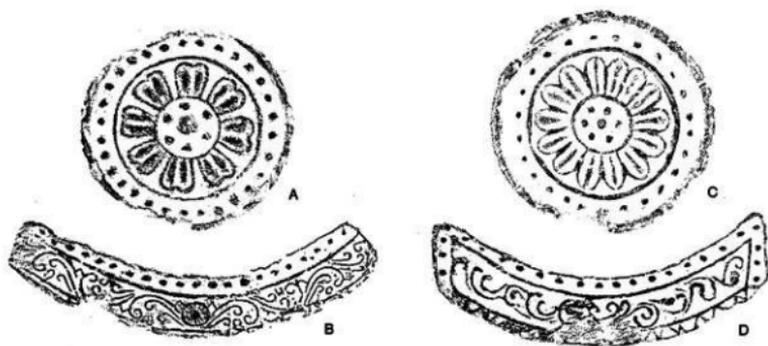
金銅製品(巻頭図版2)左は方形の孔が穿たれた直径45mmの蓋状をなし、表面には花卉文の線彫、その間に魚々子が施す。SK01出土。右上はつまみ状の飾り金具で、宝相華文を鑄出す。右下は蝶を象った飾り金具で、左右両端に直径2mmの孔が穿たれる。

ガラス製品(巻頭図版3)左上から並行式に番号を付す。3-9、10-12は小玉(直径5-12mm)、13・14は容器片、16-18は素材となるガラス棒である。直径2.5mmを測る。

瓦(第19・20図、図版7・8)1-4は花卉文軒丸瓦で、1はC-4区Ⅰ層、2はC-6区Ⅰ層、3はC-2区Ⅰ層、4はD-4区Ⅰ層からの出土である。5・6は桶巻造りによる押圧波状文軒平瓦で、5はD-5区Ⅰ層、6はB-5区Ⅰ層からの出土である。



參考資料



第20圖 瓦夾圖 (2)

奈良・平安時代の軒先瓦はS D88、およびその上面包含層から7点出土した。

軒丸瓦の出土は1種1点である。

軒丸瓦1は、単弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当半分を欠失するが、16.5cm前後の瓦当径が復元される。中房および外区には杏仁形の蓮子や珠文を配置し、蓮弁は重弁である。蓮子や珠文が円形から杏仁形へ変形している点や蓮弁輪郭線が極めて不鮮明(つぶれ)であることから、使用された范型の消耗度が高いことを知る。完形品では、中房は1+6の蓮子、蓮弁は14弁を数える。外区は25個の小粒の珠文を配置し、外縁は素文である。

類例は、福岡県大宰府の政庁南門跡、庁跡東側、水城西門などから出土している。これら瓦当面の各文様はいずれもシャープで、今回の出土軒瓦とは異質のように見える。しかし、範傷などから、両者は同範であることは明らかで、製作時期の差による同一範の変形と解釈するのが妥当である。報告によると、軒丸瓦1は第Ⅲ期大宰府政庁所用瓦で、軒平瓦3と組み合わせる。

軒平瓦の出土は2種6点である。

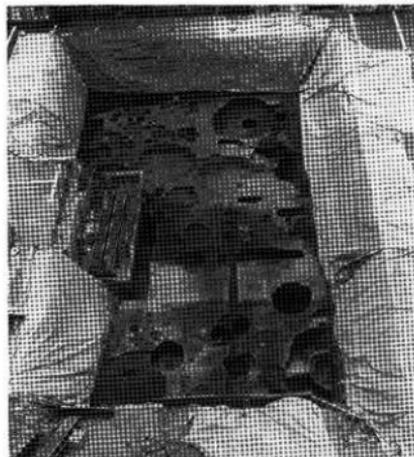
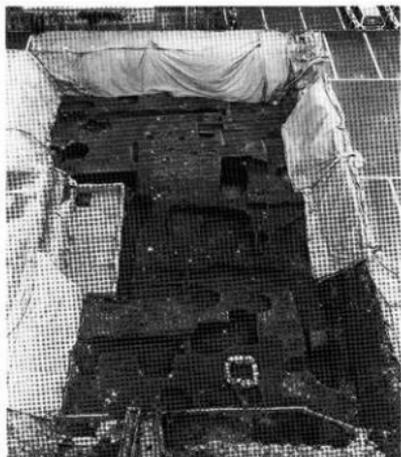
軒平瓦2は、均整唐草文軒平瓦で、瓦当中心部と右面を欠く。1点が出土した。瓦当面の厚さは4.7cm、内区厚さは3.0cmを測る。内区主文は、瓦当面中央に中心から外に向かって放射状の線がある円形の中心飾を配し、大小四本の唐草と一個の子葉とで一組とする唐草文を左右とも4回反転させる。内区左面の第2・3単位元の唐草と上外区界線との間2ヶ所には範割れが認められる。上外区は22個の大粒な珠文が密接して配される。珠文の径は0.8cm。下外区および脇区は認められない。顎は曲顎で、緩やかな曲線を描く。瓦当と平瓦との接合方法はつみ込みによる。このため瓦当の側面は丸味を呈する。平瓦の製作技法については不明。胎土は暗灰色を呈し、1~3mm程の長石・石英砂粒を多量に含む。

類例は、福岡県鞍手郡鞍手町小牧イヨ谷遺跡、福岡市鴻臚館跡、同市吉武遺跡群などから出土している。範傷などの検討からも、四者は同範である。本調査では出土しなかったが、小牧イヨ谷遺跡、鴻臚館跡、吉武遺跡群ではいずれも同範と考えられる軒丸瓦(複弁8弁蓮華文)と組み合わせる。

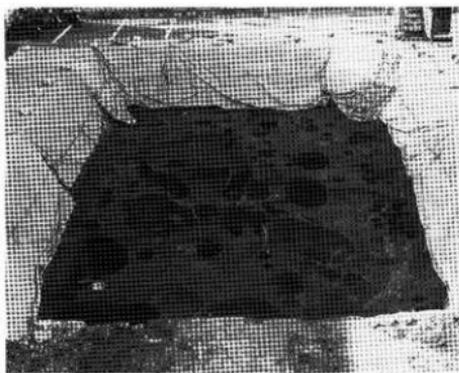
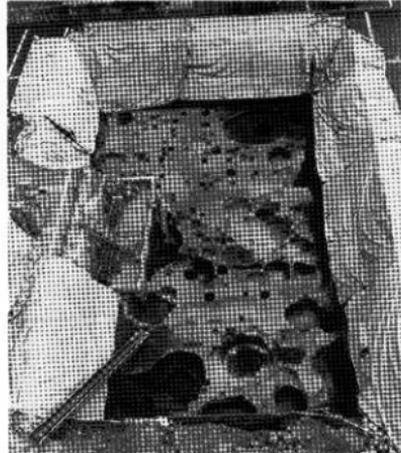
軒平瓦3は均整唐草文軒平瓦である。完形品の出土は無かったが、出土した5点により瓦当の全容がほぼ可能となった。瓦当面の厚さは5.6cm、内区厚さ3.2cm、上外区厚さ1.2cm、下外区厚さ1.2cm、脇区幅1.4cmをそれぞれ測る。内区主文は、瓦当面中央に判然としない唐草の中心飾を配し、大小二本の唐草を一組とする唐草文を左右とも4回反転させる。上外区は16個の小粒な珠文が1cm前後の間隔で配される。珠文の径は0.5cm。下外区は線鋸歯文。脇区は4個の小粒な珠文が0.8~1.2cm前後の間隔で配される。珠文の径は0.5cm。顎は段顎であるが、段は極めて小さい。瓦当と平瓦との接合方法は、平瓦端面の凹面側の縁を面取りした後に、つみ込みによる。このため瓦当の側面は丸味を呈する。瓦当に接合する平瓦は、製作技法については不明。胎土は、暗灰色~灰褐色を呈し、1~3mm程の長石・石英砂粒を多く含む。凸面には、辺長1.2~1.5cmを測る斜格子の叩き目が残る。

類例は、福岡県大宰府の政庁跡、政庁跡東側、水城西門跡などから出土している。報告によると、政庁は第Ⅲ期建物、水城西門は第Ⅲ期門の所用瓦で、いずれも軒丸瓦1と組み合わせる。

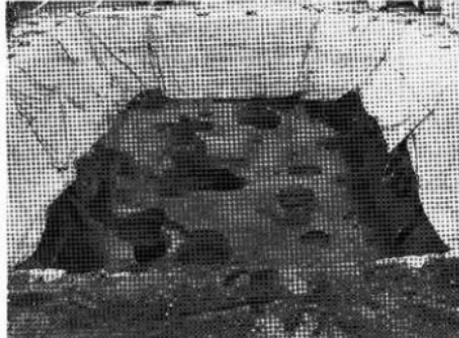
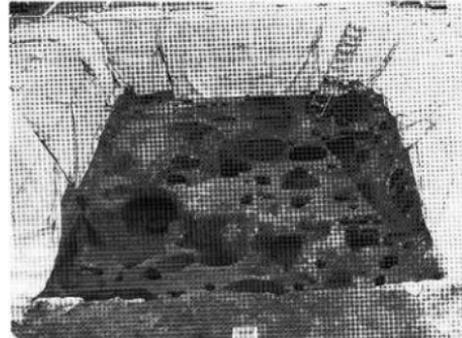
今回の出土瓦から、二つの成果を得た。ひとつは軒先瓦が9世紀初頭頃に比定される他の遺物と出土していることや、8世紀中ごろを築造の上限とする水城西門第Ⅲ期門の所用瓦であることから、8世紀後半には、調査地に大宰府に関連する施設が存在したと考えられる。さらに、その造営は水城西門の造営後に行われたことを範傷から知る。二つめは今次調査で出土した軒先瓦は、いずれも大宰府に係る施設の所用瓦である。このため、同じ軒瓦が出土した吉武遺跡においては、大宰府と強い関係を有する官衙もしくは寺院が、奈良時代後半~平安時代初めには存在した可能性が極めて高いといえる。



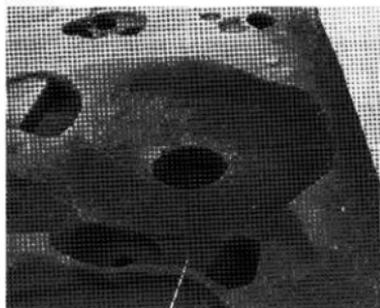
(1) 博多遺跡群第90次調査南側調査区Ⅰ層上面(北西から) (2) 博多遺跡群第90次調査南側調査区Ⅱ層上面(北西から)



(3) 博多遺跡群第90次調査南側調査区Ⅲ層上面(北西から) (4) 博多遺跡群第90次調査北側調査区Ⅱ層上面(南東から)



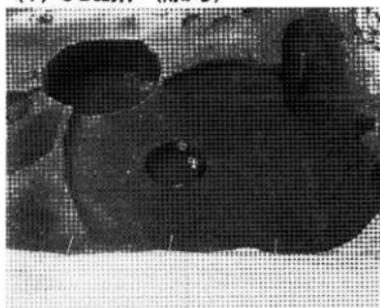
(5) 博多遺跡群第90次調査北側調査区Ⅲ層上面(南東から) (6) 博多遺跡群第90次調査北側調査区Ⅳ層上面(南東から)



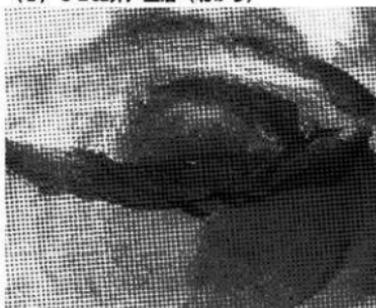
(1) SE32井戸 (南から)



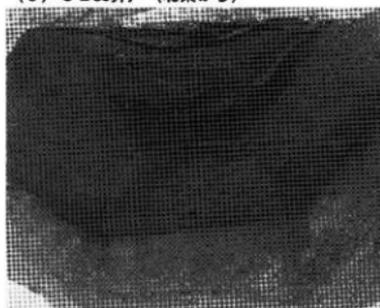
(2) SE32井戸土層 (北から)



(3) SE39井戸 (北西から)



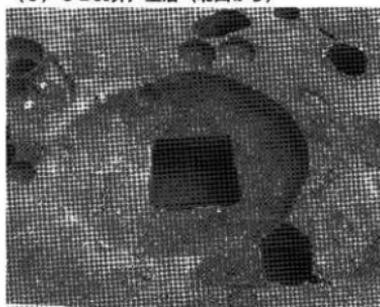
(4) SE52井戸土層 (北西から)



(5) SE56井戸土層 (北西から)



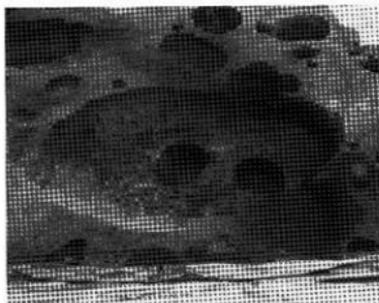
(6) SE56井戸 (南から)



(7) SE76井戸 (北西から)



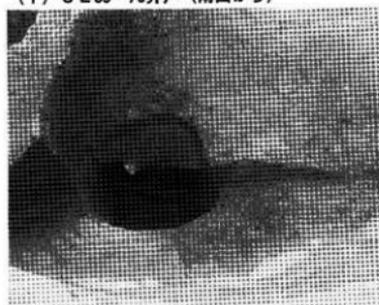
(8) SE67井戸土層 (南東から)



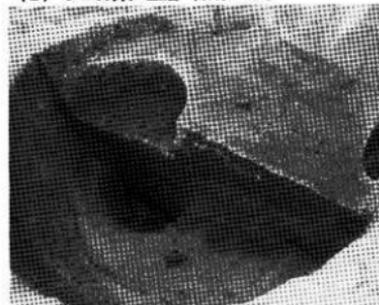
(1) SE 69・70井戸 (南西から)



(2) SE 69井戸土層 (北東から)



(3) SE 69井戸土層 (北東から)



(4) SE 70井戸土層 (南東から)



(5) SE 73井戸 (南西から)



(6) SE 73井戸土層 (北東から)



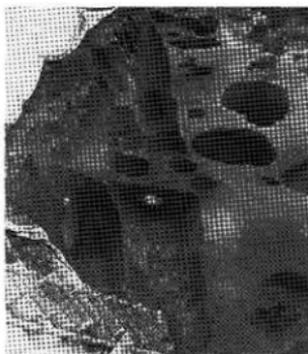
(7) SF 46道路土層 (南西から)



(8) SF 46道路土層 (南西から)



(1) SF46道路土層 (西から)



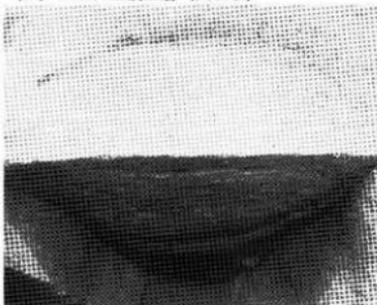
(2) SD88溝 (北西から)



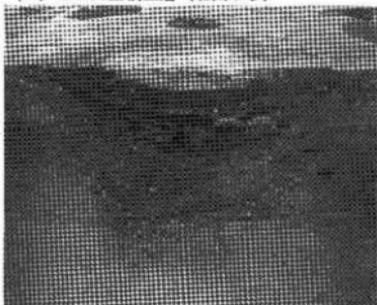
(3) SK91土壌土層 (西から)



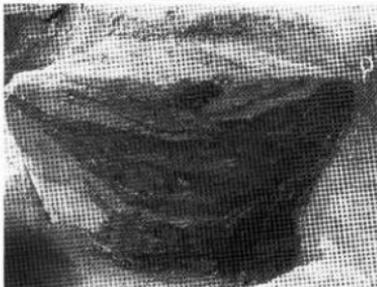
(4) SK76土壌土層 (北西から)



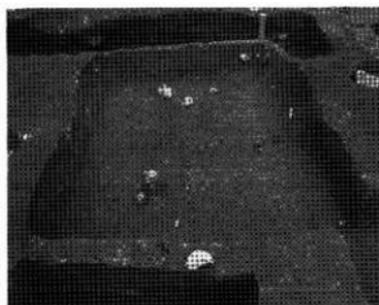
(5) Pit143土層 (北東から)



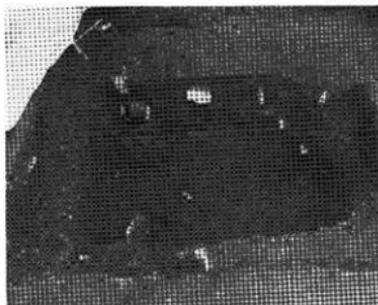
(6) SK85土壌土層 (南東から)



(7) Pit135土層 (南から)



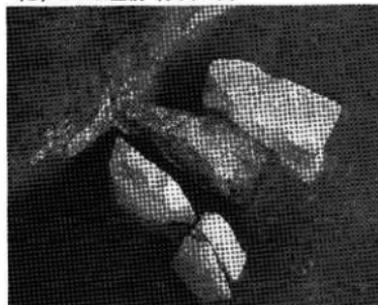
(1) SK01土壌 (南東から)



(2) SK10土壌 (北西から)



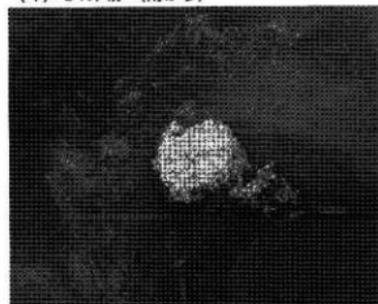
(3) SK74土壌 (北東から)



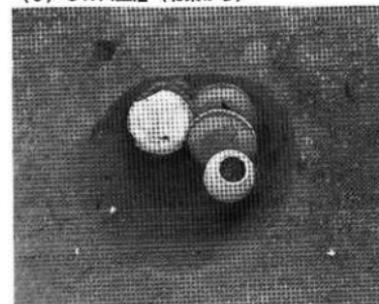
(4) SK74炉 (南から)



(5) SK74土層 (北東から)



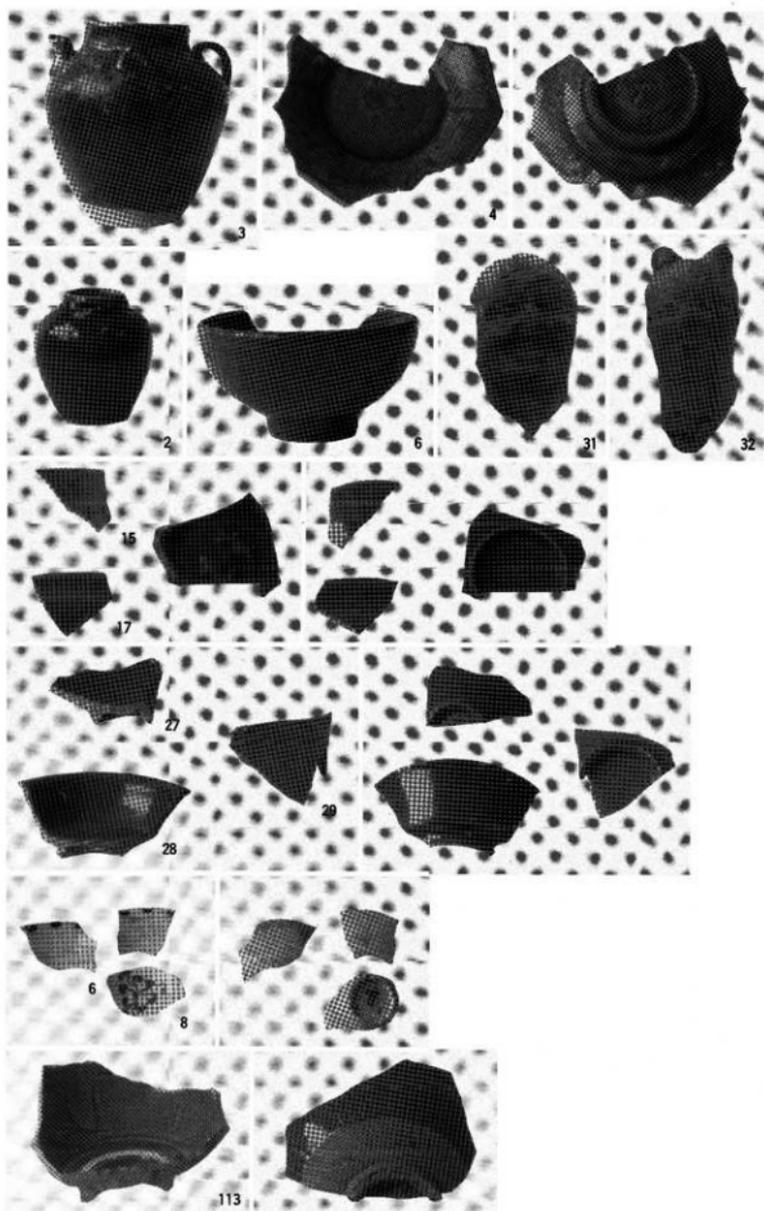
(6) SK93土壌石灰出土状況 (北から)



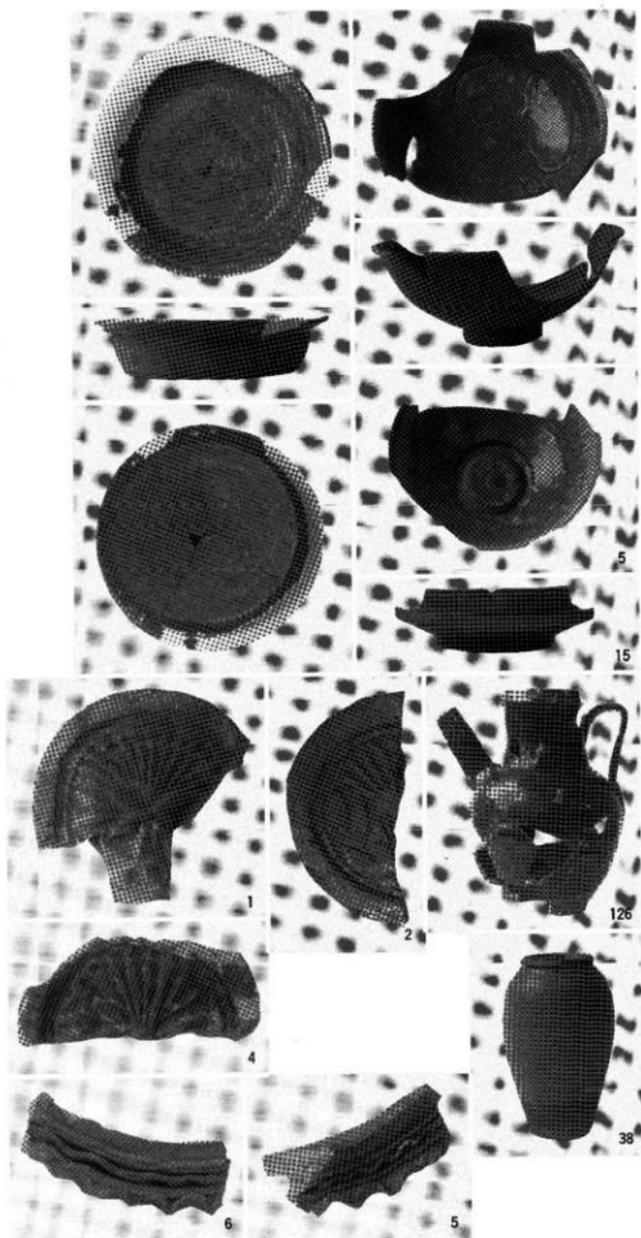
(7) SX84 (北西から)



(8) Pit254 (東から)



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



---

# 博多 62

— 博多遺跡群第90次発掘調査概報 —

1998年（平成10年）3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 江口印刷株式会社  
福岡市南区大楠2丁目22-8

---



